



BHN

ミャンマー・サイクロン被災地復興に一齐同報システム構築支援（詳細は2面に）



ナターリャ

テレコム  
クロスロード  
2010  
April  
No. 38

## 主な内容

ミャンマー事業	2面
ハイチ地震被災地調査 チャリティアイコンサート	3面
ラオス調査・中学生来訪	4面
関西事務所活動報告	5面
理事会・講演会・活動日誌	6面
	7面

## 「イラクの高遠菜穂子さん」

前 ITU 事務総局長 JTEC 理事長 BHN 顧問  
内海 善雄

先日、高遠菜穂子さんの近況が、NHK で報道されていた。人質から救出された後、日本で受けたバッシングの精神的ショックからやっと立ち直り、イラクで活動しているという内容であった。本当によかったなと思った。

8年前、イラクの武装勢力に、孤児の面倒を看ていた彼女が人質にされ、自衛隊のイラクからの引き上げが要求された。彼女は、無事救出されたが、日本政府の渡航自粛勧告や退避勧告を無視して渡航していて誘拐されたこと、また、家族が自衛隊の撤退を政府に要求したり、救出されて帰国後の会見で、「またイラクへ行き、援助活動をしたい」と発言したこと等に対し、マスコミや世間の大きな反発を招いた。「こんな女に日本政府が危険を侵し、また多額の経費を使う必要はない。すべて彼女の自己責任だ」というものであった。

私は、ジュネーブに在住していたので、日本での騒ぎは、JCTV（ヨーロッパで受信可能な日本語衛星放送）で観ていたぐらいで、直接肌で感じることはできなかった。しかし、騒ぎはフィナンシャル・タイムズなどにも大きく報道され、嫌でも関心を持たざるを得なかった。欧米のマスコミは、彼女を、「人質になってもくじけず、なお援助活動をしたいという素晴らしい日本人がいる」と、褒め称え、私も鼻が高くなる思いをしたのであった。

内向きで、現状維持が基本の日本社会では、人に迷惑をかけることが一番嫌われ、そのかわり自分もそれほど人の面倒を看ない。皆ひっそりと暮らすというのが長く続いた社会秩序維持の方法である。お上の指示に逆らって危険なところへ行っただけを、どうして多額の経費や犠牲を払って救出しなければならないのか。「まして、そのことに懲りもせず、まだ迷惑をかけようとしている。言語道断である」となる。

一方、西欧社会では、多くの人は、リスクをとって、どんどん外へ行き、生活範囲や可能性を拡大していく。危ないから近寄るなどという警告をもらってもせず危険を冒すことができる者は、ヒーローだ。そして、「危ない目にあってもなおひるまず崇高な人道活動を行う意欲をもっているのは、まさに聖人だ」となる。

何ゆえにこれほど欧米での評価と日本での評価が異なるのだろうか？

いろいろな理由が考えられるが、そのひとつに、人道援助活動に対する社会的な仕組みが大きく異なることがあると思う。欧米では、人道援助活動の NGO や市民社会（civil society）が多く存在し、多岐に渡って活発な活動を行っている。日本では、これらの NGO や市民社会は、見る影もなく、まったく未発達である。その代わりに、大家族制や小さい村社会の中での相互扶助に依存してきた。しかし、この日本の伝統的な仕組みはすでに崩壊し、何でも政府に頼るようになったのが昨今の状況である。

BHN の活動が、真に評価され、発展するには、日本社会や日本人の更なるグローバル化（世界スタンダードを取り入れる）が待たれるようである。